

## 看護の仕事を実視化するとは

関西福祉大学大学院看護学研究科  
研究科長 小野ツルコ

最近、可視化とか、見える化という言葉をよく耳にする。特に意識して聞いたのは裁判員制度が導入されたところに、裁判を実視化するということが取り上げられ、取り調べを録音・録画し、捜査過程を撮影することの是非について、賛否両論があったように記憶している。

可視化とはフリー百科事典『ウィキペディア』によると、人間が直接「見る」ことのできない現象、事象、関係性を「見る」ことのできるもの（映像、グラフ・図・表など）にすることをいう。視覚化・可視化情報化・視覚情報化ということもあるとのこと。

それでは我が看護の領域では可視化についてどのように考えたらよいのかと、文献を探していたら「沈黙から発言へ」バーニス・ブレースシュ/スザンヌ・ゴートン著（早野真佐子訳）の書籍を見つけた。この本の著者はアメリカのフリーのジャーナリストで、パトシリア・ベナーが推薦の言葉を書いている。そこで看護の可視化について話題を提供したい。

看護は看護を提供する人間と看護を受ける人間との関係を基調にして展開される。看護は看護を提供する看護職者の心身を道具にして実践されるところから、看護職者のものの見方や考え方が、看護の質を決めるとも言われている。看護行為の清拭や食事介助などは目に見えるものであり、一見それは一般の人の行為とそれほど変わるところはない。しかし、看護職者が清拭や食事介助を行うとき、その人の病態生理を頭に描き、その人の気持ちを思いやり、その人の安全安楽を意識しながら行っていることは、その行為を受けている人はもちろん他者には見えない。このように看護行為の多くは他人に理解され難い。

看護の仕事を実視化するとはどういうことか。また可視化するにはどうしたらいいのだろうか。前述の著者は、看護職者の仕事を社会の人に伝えるということを勧めている。すなわち看護職者は積極的に自己紹介をし、自分がどんな仕事をしているか、その仕事はどのような意味があり、どのような効果をもたらしたか、機会あるごとに説明をすることが重要であると。また看護職者の健康に対する考え方、価値観、看護観などを社会の人々に知らせることにより、一般の人々のものの見方や考え方に影響を与えていくことが、人々の健康に対する考え方を変えていく。すなわち看護職者は常に健康教育者としての役割を担っていると指摘している。

今年4月から本学に大学院看護学研究科が開設されている。西播磨地域の看護職者のさらなる学習の場として、また研究の場として、少しでも役に立ちたいと考えている。わが日本は、ますます少子超高齢社会が促進し、看護職者に求められる役割は大きいと思われる。人々がその人なりに生きていることの意味を実感し、幸せな生涯が過ごせるように、看護が提供できるようにしたいものである。そのために本学の看護学部や大学院が、看護の可視化に貢献できるように、研鑽をつまねばならないと考えている。